

顔真卿「祭伯文稿」の推敲過程

—— 書的考察から書者の心情変化を読みとる ——

The proress of elaboration in Ganshinkei' Saihakubunkou

—— examine the change of his mind through references in calligraphy ——

田 中 祐 次 (福岡教育大学大学院美術教育専攻)

小 原 俊 樹 (福岡教育大学美術教育講座、書道分野)

(平成十九年十月一日受理)

序

一、「祭伯文稿」概説

二、「祭伯文稿」の推敲過程

三、「祭姪文稿」・「争坐位文稿」との文字比較

結

序

顔真卿は、書聖王羲之の正統的書法に抵抗し、革新的な書を打ち出した人物であり、書道史上、不動の地位を築く大家である。しかし、その伝統に抵抗するためには、正統的書法があつて存在するわけで、羲之書法を理解しておく必要があり、彼もまた相当に羲之を研究したに違いない。杉村邦彦氏は、「顔真卿の思想や生活の中には真の意味で伝統を否定したり、体制に反発するという生き方は全く見られず、羲之の伝統を

頭から否定したなどとは到底考えられない。むしろ、羲之の伝統への忠実な参入を前提としなければ、顔書の本質を理解できない。」としている。

顔真卿が脚光を浴びるようになったのは、北宋中期以降であり、北宋の初期あたりまではさほどの評価を得ていない。

今回、祭伯文稿の推敲過程を辿るわけだが、すでに書論研究会発行の雑誌『書論』において、「祭姪文稿」の推敲過程を船橋秋男氏と池田哲也氏、「争坐位文稿」の推敲過程を池田哲也氏によって一通り研究が進んでいる。そこで、顔真卿の三稿のうちのもう一稿、「祭伯文稿」の推敲過程を辿ろうとするのが本稿である。

「祭姪文稿」・「争坐位文稿」と比較すると、筆力が緩弱であり、真卿の力強さ、飛鷹運動する草稿特有の自然な魅力からすると、「祭伯文稿」の評価は低く、どこまで真蹟の真をとどめているかは疑問で、同列

には論じられない。しかし、拓本でありながら、卒意性のある「草稿」は、大変貴重なもので、碑の「飾られた書」よりも真卿の自然体を感じ取れると考えた。

本稿では削除（文字上を直線で消したもの、文字を円形で囲んで削除したもの）、訂正、原文への挿入についてリストアップして、その推敲過程の考察を試みた。

## 一．「祭伯文稿」概説

「祭伯文稿」（祭伯父豪州刺史文・告伯父元孫文稿）は、祭姪文稿・争坐位文稿とともに三稿と称される。本稿中の行数は行間の書き込みを省いて二十八行、全文四〇一字から成っており、制作年は乾元元年（七五八）十月である。祭姪文稿の制作年は同年の九月なので、この一ヶ月後に祭伯文稿は書かれたということになる。

顔真卿がこの文を草したのは、御史・唐旻の無実無根の弾劾により、前任の蒲州刺史から饒州刺史へ左遷され、その地への赴任の途次、洛陽に立ち寄って伯父の元孫の墓に詣でたおりのものである。

内容は、安史の乱で惨殺された元孫の子の杲卿が、その忠節により朝廷に褒賞されたこと、戦乱のために離散した婦女子や縁故者が無事に帰郷したこと、顔真卿自身もその功により褒賞を得たこと、杲卿と同じく殉難したものおよび生存者たちも、身分に応じて朝廷から表彰されたことをいい、元孫の墓前にこれを告げたものである。

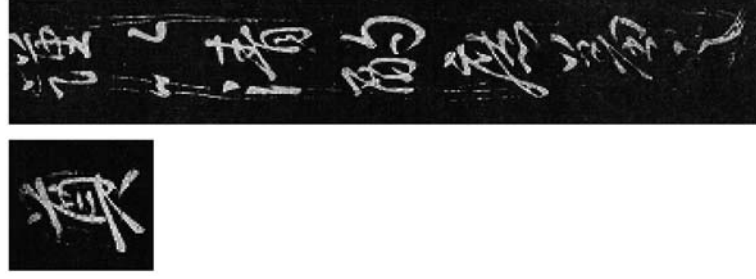
この稿は、現在刻本のみしか伝わらない。それも底本とした「甲秀堂帖」本と、「鬲岡齋帖」本の二種とその模本である。

明末清初には、祭伯文稿の真蹟本が伝わっていたらしく、明の李日華

『味水軒日記』（巻二）、清初の下永譽『式古堂書画彙考』（巻九）、高士奇『江村銷夏録』（巻二）にも記載されている。また、北宋時代にも真蹟本があるという記録はあるが、明清に伝来したものとは同一本かどうかは分からない。

## 二．「祭伯文稿」の推敲過程

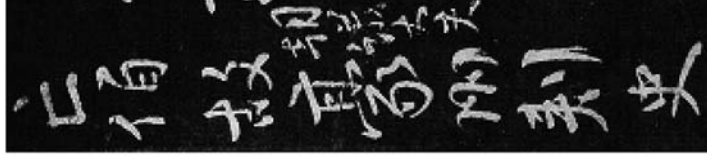
### ①六行目 謹以清酌庶羞之奠→（削除）



祭姪文稿においては、まず顔真卿が自らの地位・役職等を述べた後に、「清酌庶羞（礼酒と山海の珍味・ご馳走）を以て・・・。」と記されている。この場合においては、甥の顔季明に捧げた弔辞ということもあって、右記の語句を用いることで、表現が柔和になり、年下の者に対しての優しい心遣いが伝わるような言い回しに成功している。祭伯文稿も同様に「清酌庶羞」と記されているが、削除されている。おそらく、このような内容の文章を墓前で報告する際には、礼酒や諸種の供え物を持参するのは当然であり、「わざわざ持って来しました。」というような、いかにも恩着せがましい表現になるのを避けたのであろう。また、対象者が目上の人物である伯父の顔元孫であるということから、文章の厳格性を保つために削除したというようなことが考えられる。円形で囲って削除はしてい

るものの、「清酌庶羞之奠」の上に、「謹以」と記することによって、顔元孫に対する礼節・配慮が伺える。

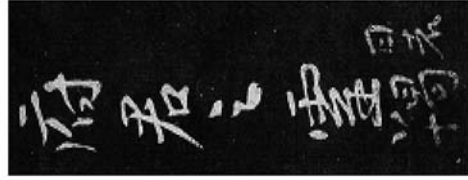
- ②八行目 敢昭告于亡伯故豪州刺史府君之靈→「故」と「豪」の間に「朝議大夫」を挿入。



亡伯とは顔元孫（？～七一四年）、字は聿修をさす。『干祿字書（元孫が進士に及第した後に作成した、進士登用試験の受験参考書）』の編者である。朝議大夫は分散官二十九階級中の正五品下。豪州は現在の安徽省鳳陽県辺。府君は漢代における太守の尊称であったが、唐以後には、先代の尊称となった。

「朝議大夫」という官名を挿入しなくとも、文章は通じるが、元孫の高官位をより明確に示すために挿入したものと思われる。

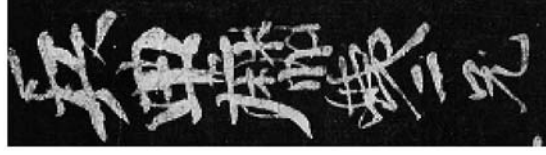
- ③八行目 靈羯→「靈」と「羯」の間に、「日者」挿入。



前の文章で、真卿が自らの出身地や官位を述べ、後に元孫の生前のキャリアを記した。いよいよこの挿入文から、安史の乱の戦況を綴っていく。この祭伯文稿を書いているときはすでに戦後になるので、「日者」は、『漢書』にもあり、過ぎ去った日・かつて・先日などをさす。ここから

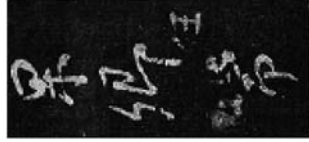
本題に入るための準備であると同時に、一旦区切って、文章を明瞭にしている。

- ④十行目 □□□□→「兵甲靡夷」を重ね書き。



ここは、安史の乱で人民が塗炭の苦しみを受け、戦況が悪化していることを記している。「兵甲靡夷」の重ね書きの下にわずかに文字を書いているのが確認できるが詳細は不明である。いずれにしても、戦況の悲惨さを書いたことには間違いない。真卿にとって、この文章表現が一番的確であったのだろう。祭伯文稿（甲秀堂帖本）の全文章中で、最も文字が大きいところで、顔法的な筆意を如実に感じることができる箇所であるといえる。

- ⑤十行目 二兄杲卿常山→「卿」と「常」の間に「任」を挿入。



二兄は顔氏における排行。真卿の従兄にあたる。「任」挿入後の文章では「常山郡の太守に任ぜられ、（忠義憤発し）・・・」となる。「任」を挿入しなかったとしても、「常山郡の太守で、（忠義憤発し）・・・」となり、文章の意味には何の差支えもない。「任」を用いることで、周囲の

期待の大きさを感じさせる。この挿入は次の⑥に関連してくる。

- ⑥ 十く十一行目 常山作郡首唱忠義↓「作郡首唱」を削除して「山」と「忠」の間に「郡太守」を挿入。



常山郡は、現在の河北省正定河北平原の要衝の地である。原文の通りに進めていくと、「常山に郡と作り首唱する」となり、十分に杲卿の人格を表現しきれていないと考えたのだろう。杲卿の厳格かつ勇猛果敢な人格を表現するためには、単に「首唱（先頭に立って唱える）」とするのではなく、「先陣をきって、忠義心を奮い起こし・・・」というように「忠義憤発」の語句が必要不可欠であったのだ。「忠義憤発」のあとに「首（はじめて）」とあるので、いずれにしても「首唱」は不必要である。そこから考えるに、「作郡首唱」と書き、直ちにそれを削除し、「忠義憤発・・・」と続いていったのではないか。杲卿の勇敢な活躍ぶりを元孫に詳細に伝えようと推敲している真卿が想像できはしないだろうか。削除した「作郡首唱」の「郡」の傍の部分に「守」とも見えるが、文脈から考えて、「郡」としてよいだろう。

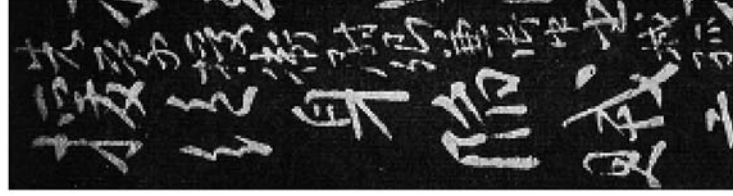
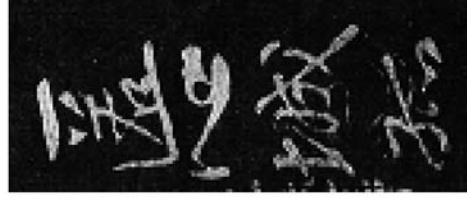
- ⑦ 十一行目 忠義憤発↓「憤」重ね書き。



⑥を受けて。「憤」を原文の上から重ね書きしているが、杲卿の人格

を顕す「忠義憤発」を勢いよく書こうとするあまりに誤字をしてしまったのではないか。真卿が杲卿に乗り移ったかのような感情の高ぶりである。「憤」の三画目の縦画に凜とした信念の強さ、芯の強さのようなものをひしひしと感じる。

- ⑧ 十二行目 挫其凶慝城孤↓「慝」と「援」の間に「先蒙授衛尉卿兼御史中丞。孤城」を挿入。



杲卿が先陣をきって（敵に占拠されていた、かの）土門を奪回して道を通じ、反逆者を捕まえて斬り殺し、賊の凶悪を挫いた。その功をたたえるべく、衛尉卿兼御史中丞の栄を授けられた場面である。

原文においては、「・・・其の凶慝を挫く。孤城にして援絶え、身は賊庭に陥る。・・・」となっていて、敵を倒したことに対しての功績が述べられていない。杲卿の目覚しい活躍を讃えるためにも不可欠の文章である。挿入文の末には、「孤城」とあるので、「慝」字の直後に来る「孤城」は削除したものと考えるほうが妥当か。実際に「慝」字の直後の「孤城」は

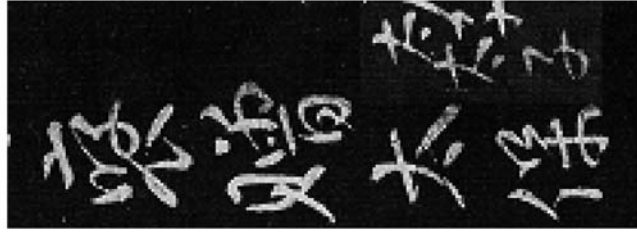


- ⑪ 十四行目 太保嫂及兒女↓「保」と「嫂」の間に「甥姪季明盧逖等。被賊害者八人。並贈五品京官。」を挿入。

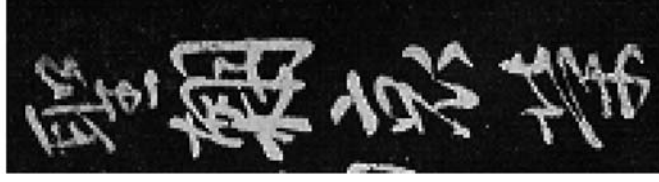
朝廷はもともと「太子太保」という官位を授けることになっているので、単に脱字したものと考えられる。

「太子太子」と続けて書いてあるのはどのような理由があろうか。

- ⑩ 十四行目 褒贈太保↓「贈」と「太」の間に「太子」を挿入。



杲卿は敵を倒したものの、孤城に援軍が現れず結果的に賊の陣中に捕らわれてしまった。それを哀れんだ朝廷が栄誉を与え、太子太保の官を追贈した。「朝」と重ね書きした下には、「月」のような文字が確認できるが、単なる誤字であろう。



- ⑨ 十四行目 聖□↓「朝」を重ね書き。

微かに曲線状の線で訂正されたような痕が確認できるため、削除したのかもしれない。

- ⑬ 二十五行目 真卿男顔授太子洗馬頂↓「馬」と「頂」の間に「諸姪男等。」を挿入し、「頂」の後に、「授協律郎。顔授秘書省校書郎。賜緋魚袋。」袁衡華亭丞。泉明顯顯等

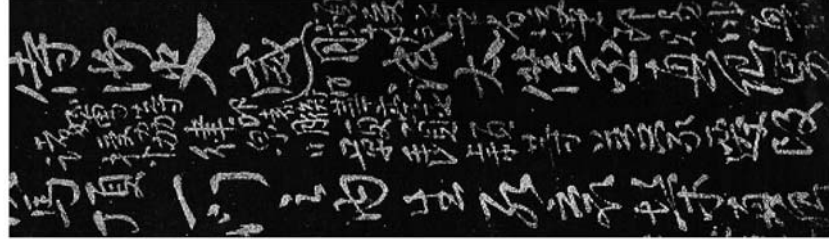
「大門」は大門中ともいい、亡祖父もことをなす。ここは、亡き祖父・昭甫・兄弟兒姪にまで悉く国恩を賜ったことを書いている。やはり、「兄弟兒姪」に栄誉が行き届くほどに、いかにこの戦がいかに大功績であったかを物語っている。



- ⑫ 二十三行目 大門贈華州刺史允南授膳部郎中↓「史」と「允」の間に「兄弟兒姪。尽蒙国恩。」を挿入。

「太子太保を褒贈す。」の後に、「嫂及び兒女、皆拘囚せらるるも・・・」と真卿一族の内容を綴っているが、真卿が報告しているのは、元孫であるため、真卿（筆者）の一族に関する事項は後回しにして、先に元孫の一族である季明らに授けられた栄誉を述べる必要があった。自分より目上の人物に対する、真卿の礼儀・配慮が随所に伺える。



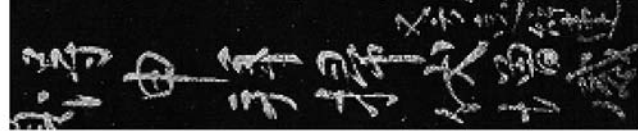


並蒙遷改。」を挿入。

挿入文の内容は、「(真卿の息子・頰は太子洗馬を授けられた。)多くの姪男のうち、(頂は、)協律郎を授けられ、頰は秘書校書郎を授けられて緋魚袋を賜り、袁衡は華亭丞とせられた。泉明・顥・頰・頰等も、それぞれ栄転した。・・・」と長きにわたって挿入されており、祭伯文稿中で最も長い挿入部である。

「真卿男」と書いた後に、次の行に移るが、かなり余白をとっているため、「真卿男」を書いた時点で、「授協律郎。頰授秘書省校書郎。賜緋魚袋。袁衡華亭丞。泉明顥頰頰等並家遷改。」を挿入することを考えて、大きく行間をとった。この行間に挿入文全文を収めようとしたが、長文のため入りきれず、やむなく前行にも一部挿入した。

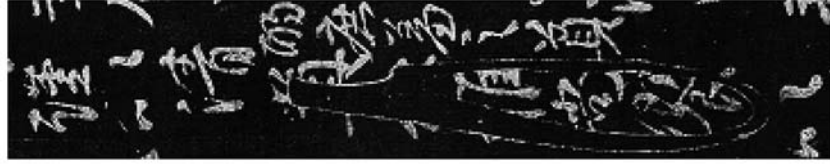
「諸姪男等。」を「授協律郎。・・・」の前に入れているが、「諸」の次の「姪」字から、「授協・・・」を避けるように挿入しているために、後に挿入したことが分かる。



⑭ 二十六行目 得申拜掃伏増感咽→「掃」と「伏」の間に「又方遠辭違。」を挿入。

真卿は、饒州の地に赴任するにあたり、ここ東京・洛陽に着き、再び墓参がなかった。「又方遠辭違。」を挿入することによって、本当に元孫の墓参を待ちわびていたと同時に、またとないかもしれない機会に深く感慨している。

⑮ 二十七行目 謹以清□□□□□以→「□□□□□」を田形で囲み削除。「清」の後に「酌庶羞之奠」を加え訂正。



①と文章を統一するために原文を訂正した。

### 三、「祭姪文稿」と「争坐位文稿」との文字比較

「祭伯文稿」は、「祭姪文稿」・「争坐位文稿」と比較した場合、先人の論評によれば、圧倒的に評価が低く、同列に論じられること少ない。その原因として、肉筆でないということが最大の難点である。しかし、「争坐位稿」に関しては、「祭姪文稿」に勝るとも劣らない存在感がある。

右の二稿共に「・・・年歳次戊戌」と同じ箇所である。「祭伯文稿」の「年」は五画目の収筆のバネを活かしてスムーズに最終画に繋げたいところだが、その勢いを殺してしまっており、やや不安定な縦画となってしまう。その点で、「祭姪文稿」は最終画で、張りとう重量感を感じさせる縦画を引いていて魅力的である。「歳次戊戌」の文字に関して徹底的に違いを感じるのが四文字ともに共通する、右斜め下に伸びる「戊」の画である。「祭伯文稿」は一般的に書かれているのに対して、「祭姪文稿」は揺るぎ無い張りと速度感のある筆力を感じる。

〈祭姪文稿〉



〈祭伯文稿〉



#### ①文字骨格が適度な点の比較。

拓本でありつつも、郭英乂の不正義に対して激する気持ちを押し殺すかのような息苦しさとう暴発寸前の感情が文章から滲み出てきて緊迫感が終始継続しているのだ。確かにそのような点ではかなり優秀な拓本であることは間違いない。しかし、眼差しを変えて見ていくと、「祭伯文稿」の方が懐広く構えていて、穏やかにゆったり運筆しており、雄大に感じられる箇所があることも確かである。そこで、本章では、「祭姪文稿」・「争坐位文稿」と比較して、どのような点が緩弱に感じるのか、どの文字が真卿に迫っているのかを確かめようと思う。

〈争坐位文稿〉



〈祭伯文稿〉



右の「開土門」は、「祭伯文稿」「祭姪文稿」の各々の古典の特徴が顕著に出ている部分である。「祭伯文稿」は比較的一定の調子で運筆し、淡白に書かれているのに対して、「祭姪文稿」は、持ち前の顔法を駆使し、胴張りで不動の造形である。「開」字・「門」字の六画目の造形は全く違うが、それぞれに筆力のある強さを感じる。

〈祭姪文稿〉



〈祭伯文稿〉



右の「祭伯文稿」と「争坐位稿」は同じ文字ではないが、部分的に同じなので取り上げた。「身」の部分で、「争坐位稿」は、三画目の縦画に入る前の転折で、横画からの弾力を受けて縦画を書いているのに対して、「祭伯文稿」にはそれがなく、横画から縦画へ一連の動きで書いたのが

右は「顔真卿」の三文字で比較しているが、「祭伯文稿」は連綿も使っていてそれなりに流れもあるが、「祭姪文稿」はその点さらに上をいっており、比較すると歴然で、流動性と弾力性に秀でている。これはやはり、肉筆と拓本の違いであろうか。

〈祭姪文稿〉



〈祭伯文稿〉



## ②文字の流動性の比較

確認できる。これは「祭伯文稿」全体を通して言えることでもある。この動きが、大らかさを醸し出しているといえ、また、緩弱に感じる原因の一部であらう。

## ③構えが大きい文字、懐が広い文字

全体的な行の流れで見ても、「争坐位文稿」「祭姪文稿」に比べて、「祭伯文稿」は、比較的緩やかな速度で書かれており、文字と文字の連動が少なく、一字一字が独立して単発な感じが見受けられる。逆に丁寧に書かれたともとれるかもしれない。

〈祭姪文稿〉



〈争坐位文稿〉



〈祭伯文稿〉





〈祭姪文稿〉



〈祭伯文稿〉



## 結

「祭伯文稿」の推敲過程を辿ってみて、「祭姪文稿」「争坐位文稿」ほどの劇的な感情の変化は感じなくとも、僅かな変化や顔真卿の律儀な姿勢を感じることができた。この違いには、三稿各々の書する内容が大いに関連してくる。「祭姪文稿」に関しては、甥の季明が安史の乱で惨殺されたことに対する悲憤なる感情がほとぼしり出ているのが、痛いほどに理解できる。「争坐位文稿」に関しては、郭英乂が、悪玉宦官の魚朝恩に諂い、集会の坐位を乱した事に対するの怒りが滲み出ている、相

〈争坐位文稿〉



構えの大きさ、懐の広さという面では、三稿各々に良いものがあるが、この点に関しては「祭伯文稿」の大らかさが、構えの大きさ、懐の広さをより助長しており三稿のなかで最も優れているのではないだろうか。

当推敲に推敲を重ねてじっくりと感情を抑えながら書いたように思う。それに対し、「祭伯文稿」は、伯父の顔元孫に、安史の乱で殉難した、元孫の子の杲卿をはじめ一族の者に、朝廷から表彰があったことを報告した内容である。このことは、非常に名誉かつ、喜ばしいことであるので、書きぶりも非常にリラックスしているのが分かる。そのために、ゆとりのある大らかな文字になったのであろう。著名な先人が酷評したからという付加価値のみで、鼻っから良いものではないと決め付けるのは避けるべきではないだろうか。まずは自らの眼を通して直接見ることで、初めて分かる発見もある、ということを「祭伯文稿」は教えてくれる。

#### 主な参考文献

- 『顔真卿書蹟集成』 中田勇次郎編 東京美術 一九八五年  
『書苑』第三卷・第七号 (株)三省堂 一九三九年  
『書論』第十号 書論研究会 一九七七年  
『中国書法選』四十一 二玄社 一九八八年  
『中国書法ガイド』四十一 二玄社 一九八八年